

塩の道其の一

馬頭観音

当時最良の運搬手段として馬が使われていた。馬の安全を祈願し、馬の守護神として塩の道に沿った地区に祭られている。

塩の道は大板から奥に入り別府の四ツ足峠、久保の葦生越え、笹の三つの往還が四国山脈を越えて阿波へとつながり、海から山の奥地から海へ、79人の人の生活を支えた道であった。



馬頭観音無事祈

神祭には赤岡まで魚と買いに行くと



至西能笹久保

山から海へ 海から山へ 時代を越えていともなく道 今と昔をつなぐロマンある道

御在所山がよく見える



塩の道は「美しい日本の歩き方」になる道50選に選ばれている。

大板〜赤岡30km

遠くに出かける人はももひきまきばんにさうりばまといいた軽い身なりでいざい飯と背おき歩いた



七浦往還

同じような谷と川が七つも似たようなところが続くので七浦往還といわれる。

大板や山崎は猪三橙でつかった紙漉しが盛んでした。大比日本が少なかったのは沢から流れてきた。

昔から店と宿屋を昔ながらの行末交う人の休憩所として終戦後もあちこちに出していた。

大比

大釜跡

大比馬頭観音

大板馬頭観音

葛橋記念碑

塩の道起点

八王子宮戸

塩峯公土方神社

大板

至別府

四ツ足峠

日ノ地

〇大板の土門川

赤い旗印の塩が落ちた

山崎

昔別府の神主、惣之市が、東川(現赤坂市)の石船神社から一方のかごに塩を、もう一方のかごに御神体を入れ、塩峯まで来たところ、担いでいた担い棒のおおどが折れ、塩が転がってそこを塩の村と呼ぶようになった。御神体は動かなくなり、そこに鎮座したところが塩峯公土方神社であるといわれている。

山崎

天王森

大板のがすら橋には利勝尼と人柱になつたおとぎの悲話があり、大板橋のそばに記念碑がある。

大板、岡の内、押谷など各地にかすら橋があったが、子どもや老人は危険で渡れなかった。

塩峯公土方神社の御神体を運ぶ塩を落としたりは別府の力持ち、ハナ作であるといわれる。ハナ作は平家の末いびり、別府のろうには「伊瀬ハナ作墓」と刻まれた祠がある。

日浦往還の話

拓の金比羅坂を歩くと、馬が負荷の男5〜6人が日浦往還の向か、7〜8人に立ち小煙を吸っていた。谷向こうでは葦生植山は名高い公土則益大夫が修業していた。この無礼に怒り、土門を結ぶ呪いを唱え、土門を足した男は馬とどうも物ごとくなくなった。しばらくして大夫が許しをせよと法を解くと、何事もなかったように坂を歩いた。土佐の運ばしはせられんといふ話

さるとろとろ「塩の道」

海から山へ塩の道。そこから何が見えるか。ほのぼのとした大板の遠い音が見えたり、馬の背中に塩を積み、鈴を鳴らして峠越え、見渡した地蔵峠めつ、飛石渡りけそのみち、くねくね続く塩の道、馬頭観音無事を祈る

いざなぎ流



塩の道は靴や参勤交代とは異なり、庶民が歩いてきた道。

庄谷相 初代塩の道保存会 会長 公文寛伸

日浦往還 このあたりを日浦往還といわれる。日当たりが良く、昭和20年代までは杉の木一本もなく、すべて田んぼと草山だった。今はシカから植林を守り保護資料が林に113。

拓 丁石七ツ神社

庄谷相

白髪神社

地蔵堂

馬頭観音

源大坂

追いつぎ峠

馬宿跡

黒見休憩所

塩の道 復活の丁石 昭和の南海地震で倒れた草の中を眠っていたが、どうして起こしたという地主の声で有志8名が力を合わせて建て直したことが、塩の道再生のきっかけとなった記念の丁石。

庄谷相から黒見、大谷の間に塩の道が通っていた。ある時、黒見の中を歩いていると、おとぎの悲話があり、大板橋のそばに記念碑がある。

源大坂

昔、旗山に源太といふいん歌の上手な若者がいた。哀調をおびた唄声は若い女心を魅了したという。源太と同じ集落の16歳の新書である於雪が源太に思いを寄せ、夫の目を盗んで逢瀬を重ねた。二人は夫事になることができないので、来世で一緒になろうと心中を決意して、固く誓い合った。源太は於雪に晴れ着を、奥土への道中に着せたいと、ことあるうち店屋の老女を殺害して金を奪い、すぐに源太の犯行と分かり捕えられ、赤岡へ唐丸籠に入れられ護送される途中、役人の許可を得て馬頭観音の前で、故郷旗山に向けて得意中の得意「心中道行」とか雪に届けるとばかりに見事な声で唄いあげた。やがて赤岡の奉行所に着き、翌日二十歳でその生涯を終えた。一方の於雪は、何の詮議も受けて一生を送ったという。